

「協働」と「連携」によるまちづくり⑫  
 佐賀県玄海町の地域活性化事業

「ふるさと納税」を活用して  
 6,000人の小さな町が  
 地域産品の発信と地域産業の活性化を図る



2

3

4

1

佐賀県玄海町では、「ふるさと納税」を「ふるさと応援寄附金」と呼んでいるが、平成24年度で480万円ほどだった寄附金が、平成26年度1月末現在で約10.5億円と、約220倍になり、全国の注目を集めている。今回はその事業を紹介する。



今年度1月末で  
 10.5億円の寄附金を集める

全国各地で「ふるさと納税」が注目を集めている。

この制度は、任意の地方公共団体に2,000円を超える寄附を行った場合に、確定申告することによって、寄附金額から2,000円を差し引いた額が、所得税と個人住民税から控除・還付されるというもの。

平成20年4月の地方税法の改正により、地方公共団体への寄附金税制が拡充され、平成21年度から施行されている。その仕組みの詳細については割愛するが、平成25年度あたりから急激に寄附金申請者が増加した。納めた寄附金に応じて税金が控除・還付され、さらに寄附した地方公共団体の特産品などが、贈られてくる



5



6



7



8

『ふるさとチョイス』という、「ふる」といふことで、お  
 得感に敏感な都市  
 住民の注目度が高ま  
 った結果といえる。  
 そんな中、注目を  
 集めているのが長崎  
 県平戸市、佐賀県玄  
 海町、北海道土幌  
 町の3自治体。

- 【写真】 1 謝礼品として大人気の佐賀牛は、写真の(株)上場食肉などの事業者から送られる  
 2 玄海町産の風味豊かなうにを塩漬けにした「生塩うに」  
 3 脂の乗った「飯屋湾の真鯛」は天然ものにも負けない味  
 4 程よく乗った脂と身の締まった肉厚のカンパチ。写真は(株)渡水産のもの  
 5 豊かな土壌の上場台地で育った名産「さがほのか」。サイズの大きなものが贈られる  
 6 こだわり農家で作ったみかん「うわばの夢」は甘さが自慢  
 7 玄海町産黒毛和牛の自家製ハンバーグ  
 8 旬の時期に合わせた、季節の玄海町産の野菜の詰め合わせ

■玄海町情報■

【人口】6,137人(平成26年12月31日現在)  
 【面積】35.9km<sup>2</sup>  
 【発電所データ】  
 九州電力(株)玄海原子力発電所  
 【本特集問合せ先】  
 玄海町 財政企画課 ☎0995-52-2112

玄海町は鯛やハマチの養殖が盛ん。写真は仲卸業を営む(有)渡邊水産のハマチの水揚げ



■申請件数と申請金額の推移(平成26年度1月末現在)

年度	申請件数(件)	申請金額(円)
平成24年度	860	4,817,557
平成25年度	11,564	295,712,353
平成26年度	44,360	1,058,750,150

■平成26年度希望使途と申請額・納入住金額(1月末現在)

希望使途	申請金額(円)	納入金額(円)
人材育成	147,958,469	126,018,469
医療及び福祉	224,619,751	214,639,751
自然及び環境	242,195,713	229,149,713
おまかせ	443,976,217	415,235,217
H26寄付金額	1,058,750,150	985,043,150

さと納税」を紹介するインターネット専用サイトがあるが、そのPV(ページ・ビュー)数の「ビッグ3」といわれているのが、この3つの自治体だ。PV数に比例して、寄附申請金額も驚くほど多い。平成26年度1月末の申請額で、平戸市が約13.2億円、玄海町が約10.5億円、上戸幌町が約8億円と、他の自治体とは桁違いの寄附金を集めた。中でも玄海町は、左表にあるように、寄附申請金額を平成24年度に比べて約220倍に伸ばした。詳しくは玄海町のホームページ(www.town.genkai.saga.jp)を参照していただくとして、一口5,000円以上から100万円まで、7種の「寄附プラン」を用意して、それに対する謝礼の品としての地域産品も、バラエティに富んでいる。

「玄海町ファンづくり」と「地域産業の振興」を目指して

「玄海町は今まで、一次産品で注目を集めることはありませんでした。玄海町の産品は他地域に負けない大きな魅力を持っているのに、PRが下手だったのです。この制度は、そのため、恰好のツールになりました」と、担当の財政企画課主事の井上俊一さん(30歳)は語る。

平成24年に、担当となった井上さんは、この制度の持つ様々な課題を研究し、「地域産品の発信ツール」として絶好の手法であることと、事業を推進する町内の事業者の所得を少しでも向上させる機会であることとを確信する。

その事業目的を、単に寄附金を集めるだけではなく、「自らの地域を全国に発信することであり、多くの玄海町ファンを作ることと、この事業を通じて地域産業の振興を行い、生産者の所得の向上を目指すこと」とした。



玄海町 財政企画課 主事 井上 俊一さん



丹精込めて育てられた高品質の黒毛和牛

そのため、従来にも増して、町内の生産者や加工事業者との「連携の強化・拡充の必要があった。寄附申請者に対する謝礼の品が多様で、しかも、安定的に贈ることができるような供給ネットワークの形成が急務となったのだ。玄海町は『佐賀牛』で知られる肥育牛の産地あり、鯛やハマチ、トラフグの養殖でも知られ、土壌豊かな上場台地で生産されるイチゴやミカンの産地でもある。役場は、肥育業者、農家、養殖漁家、加工業者、町おこしグループなどに、この「ふるさと納税」の仕組みの説明を行い、協力を要請した。同時に、発信力の強化のために、インターネットサイトの『ふるさとチョイス!』との連携を図り、『Yahoo! 公金支払い』のクレジット決済を可能にした。さらに、役場の事務処理を簡素化するために、今年度は独自にPC処理システムを導入して、環境を整えていった。

役場の協力要請に、積極的に応じた事業者のひとり、世戸耕平さん(35歳)。創業40年の(株)上場食肉の専務取締役として、食肉販売の店と、焼肉レストラン「上場亭」を2軒経営する青年実業家だ。井上さんは、商品の安定供給によってリーズナブルな値段を可能にしている世戸さんのノウハウと、ネットワークに期待した。「以前から、町のために何かできないかと思っており、役場からお話があったとき、積極的に協力したいと思いました」と、世戸さんは言う。全国的に有名な『佐賀牛』の人気は高く、東京や大阪に販売したほうが儲かるのだが、あえて、『ふるさと応援寄附金』の謝礼の品に使ってもらうことを決めた。「結果は、目が回る忙しさになりましたが、申請者の皆さんの期待値が高く、とてもありがたいことです」そんな世戸さんに、井上さんは様々な相談をしている。後述する「クラウドファンディング」での日本酒造りのアイデアは、井上さんと町の将来を語り合ううちに出てきた。今後も世戸さんは、いろいろなアイデアを役場と協働して実現させていきたいと語る。



(株)上場食肉 専務取締役 世戸 耕平さん

「産品に自信はあったが、PRの方法がわからなかった」

玄海町は漁業の町でもある。仮屋湾や外津湾では、真鯛やカンパチ、トラフグ、ハマチの養殖が盛んだ。

仮屋漁協の筆頭理事を務める岩下巧さん(65歳)は、『仮屋湾の真鯛』のブランド化を進めている養殖漁家。こだわりの配合飼料で育てられた真鯛は、天然に近い色と肉質で人気が高い。

数年前から、都市の中学生を修学旅行で民泊させる「ATA(エリア・ツーリズム・エージェンシー)事業」を受け入れてきた。都会の子もたちが、魚に触れることができないことを残念に思っており、玄海町の魚の味に喜ぶ姿を見てきた。都会の人たちに「本当においしい魚を、もつと食べていただきたい」と、いつも思っていた。



仮屋漁協 筆頭理事  
岩下 巧さん



(有)渡邊水産の脂の乗ったカンパチ



同じく(有)渡邊水産のハマチの水揚げ作業

そんなときに役場から事業協力の話があり、岩下さんは二つ返事で協力することにした。

「つまり、私たちが生産した魚に自信はあったのですが、PRの仕方がわからなかったのです」

40cmを超えるような、大きく高品質な鯛を安定的に供給するためには、町のためにも、玄海町の漁家がさらに努力することが必要だと、岩下さんは言う。

外津湾で鯛の養殖業と、ハマチ、カンパチ、ヒラマサなどの仲卸業を営む(有)渡邊水産の代表取締役の渡邊美保子さんも、「玄海町には良い産品がたくさんあるのに、町の知名度がない」といつも思っていた。

従業員でもある2人の娘さんから、「ネット販売」の可能性を模索して

はどうかという話もあった。

役場から、この事業の話がきたとき、「女性ならではの気配りで、お礼の品を届けよう」という娘さんたちの提案もあって、この事業に協力することにした。

漁業というのは、「男の仕事」というイメージがあるが、女性の視線で商品を消費者に届けられないかと思っていたのだ。そのために、贈答の魚を梱包する箱を改良して、綺麗なデザインで印刷した包装



謝礼品の包装にも女性らしい細やかな気配り(有)渡邊水産

町内のつながりが外部の人たちを呼び込む

同じく外津地区で民宿を営む飲食店組合長の溝上孝利さん(56歳)は、長い間、玄海町のまちおこしグループのメンバーとして地域活性化に尽力してきた。今回の事業では、仮屋湾の「鯛の塩焼き」を造る加工業者として参加している。

溝上さんも、お礼の品を送るときに、送られた側が「宝箱」を開けるような気持ちになつてもらえるよう、



紙に包んで送る。また、野菜の生産者と連携して「鯛しゃぶと野菜の鍋セット」なども考案した。「美味しかった。もう一度食べたい」という寄附申請者の声が嬉しいと渡邊さんは言う。「これからも、細かな気配りで、私たちの思いをお届けしていきたい。実感として玄海町ファンが増えていると思います」

季節ごとに、折り紙や手製の箸袋などを同梱するような工夫をしている。「大事なことは、全国の皆さんに



民宿経営/飲食店組合長  
溝上 孝利さん

(有)渡邊水産代表取締役の渡邊美保子さん(右) 従業員の娘さん福菌志麻さん(中)と渡邊志織さん(左)

民宿『要太郎』の「鯛の塩焼き」。季節ごとに折り紙などを同梱している



真心こめて丁寧な梱包を心がける(『要太郎』)

喜んでもらえるような良いものを作っていくことです。そのためには、生産者と加工業者による本音の意見交換が必要。人と人のつながりが強いところには人が寄ってくるのです」  
溝上さんは町内のさらなる連携が、町外の人たちの賛同を呼ぶことを強調する。

「この事業で少し余裕が出てきました」と言うのは、玄海町農畜水産物加工所利用組合の代表・松本静江さん(60歳)だ。

有浦地区にある『ふるさと発想館』という加工場と直売所を兼ねる施設を管理する農漁村の女性グループの代表。12年前から、味噌や惣菜、こんにゃく、『イチゴ羊羹』などのお



玄海町農畜水産物加工所利用組合 代表 松本 静江 さん

菓子、『イチゴジャム』などを作って販売してきた。

現在の組合員の数は51名。加工を担当する会員は17名だが、平均70歳以上と高齢化が進み、ここ数年は施設を維持するのがやっと、という状態だった。

この事業では、100万円の寄附『金のプレミアムプラン』を担当している。毎月3万円相当の町内の特産品を集めて発送する。本年度1月末で約290件の申請があったため、その作業は大変だが、「良いものを届けたい」という一心で、申請者の

様々な「リクエスト」にも対応している。その結果、少しずつだが事業収益が好転してきた。

「これで、生き延びることができるかもと思っています。後継者育成が急務なので、この事業で原資を作っていきたい。活動を始めてから12年間、生産者の人たちや役場とともに頑張ってきた甲斐がありました」と、笑った。



平成15年に整備された『ふるさと発想館』



直売所を兼ねる館内には玄海町の産品が並ぶ

## 玄海町ファンが 事業者と直結していく未来を見据えて

前述の財政企画課の井上さんは、玄海町が一定の成果を見ることができたのは、スピード感を大事にしたことだと言う。迅速に、事業者とのネットワークを確立したことやインターネット接続業者との連携、役場内の事務処理の簡素化を図ることによって、先行者メリットを享受することができた。

来年度から、この「ふるさと納税」制度はさらに拡充され、寄附する側の控除手続きも簡素化される。全国的にも、さらに寄附申請者が増加することだろう。

平成26年度1月末だけでも、約4万2,000件の寄附金申請者があり、玄海町を知る人は確実に増加してきている。町内の事業者の数も、現在の30事業者から、今後さらに増加することが予想される。

最近では、寄附額以上の価値を持つ謝礼品を贈る自治体もあり、こうした「謝礼品合戦」に苦言を呈する人もいる。玄海町では、謝礼品の、いわゆる「還元率」を35〜50%にして、常識の範囲内に抑えている。

ただ、このような「ふるさと納税ブーム」は永遠に続かないだろうと

いうことは、役場も事業者も十分理解しており、意外に冷静だ。

事業者が目指しているのは、この事業を契機として、消費者と生産者が直結すること。そのため、損傷を防ぐ「しっかりした梱包」を行い、自社PRのためのパンフレットを作成し、心のこもったお礼状などを必ず添えている。「産品に対する思い」や「心遣い」を徹底して大事にする。

また、役場も、贈答品に対する寄附申請者のメッセージや苦情は、必ず事業者にフィードバックして、この事業の「改善」を図っている。持続的に「生産者と消費者がつながっていく」方向を見据えているのだ。



玄海町の予防接種事業や子供の医療費助成など医療および福祉のために幅広く使われる



集められた寄附金は『グレードアップ学習塾』などの人材育成事業にも使われる



玄海町では平成27年度に『棚田サミット』の開催が予定されている

## これを契機に 総合的なPR戦略の策定を目指す

集めた寄附金だが、その使い道として、玄海町が寄附申請者に明らかにしているのは、①人材育成事業、②医療および福祉、③自然および環境、④おまかせ、の4つ。申請者の希望用途の申請額はP.4の表にあるとおり。

基金として積み立てられた寄附金は、町の状況に応じて具体的な事業として使われている。現在、人材育成事業では、開設されている『グレードアップ学習塾』、医療および福祉事業では、義務教育の医療費無料の財源に、自然および環境事業では来年度に開催予定の『棚田サミット』事業など。

今年度から新しい事業として「クラウド・ファンディング」を開始した。「クラウド・ファンディング」とは、個別の事業に対する、インターネットなどを活用した資金調達をいう。第1弾は「玄海町の棚田米で造る純米酒」。500万円を集めて、純米酒4,200本とスパークリング清酒800本を唐津の酒造メーカーと連携して造る。この事業に賛同して寄附をした人々には、今年3月まである日本酒1セットが謝礼として贈られる。



玄海町を代表する名所「浜野浦の棚田」

第2弾も進められており、今年3月に東京・築地で開催される『玄海町フェア』を『築地ボン・マルシェ』で行う予定で、この事業の賛同者を募り、300万円の寄附を集めた。今後の課題は、さらに「玄海町」を売っていくこと。

「これらの事業で、町が活気づいてきたことは実感としてあります。今後は、これをステップに、産品だけでなく、玄海町そのものを売っていく総合的なPR戦略を作成していくことだと思います」と、井上さんは語った。豊かな産品を生み出す風土、そこ

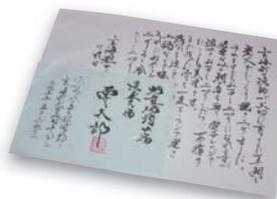
に生きる人々…。今、この「6,000人の小さな町」は、全国に向けて、積極的に自らを語り出し始めた。その未来を多くの「玄海町ファン」が注目している。



「クラウド・ファンディング」の事業で、棚田米で造られる純米酒(左)とスパークリング清酒(右)



しっかりと、しかも細やかな気遣いの梱包で贈られる



謝礼品には必ずお礼状やパンフレットが同梱される